

打楽器奏者と音楽をつくるアウトリーチ活動

－特別支援学校での取り組みを中心に－

Music Outreach with Percussionist: Making music with Students at a Special Needs School

可児 麗子
Reiko KANI
打楽器奏者

岡 ひろみ
Hiromi OKA
滋賀県立新旭養護学校

林 睦
Mutsumi HAYASHI
滋賀大学教育学部

<キーワード> 打楽器 アウトリーチ 音楽づくり 創作 特別支援学校

1. はじめに

「アウトリーチ (outreach)」という言葉は英語で、「手を伸ばすこと、差し伸べること」という意味をもつ。もともとは社会福祉の分野で一種の啓蒙活動、教育普及活動という意で用いられ、現場へ出向いて活動するなど、受け手の立場に立った手法を取ることを特徴としている。そこから転じて、音楽分野でのアウトリーチとは、音楽家や音楽団体・機関が、普段音楽に触れる機会の少ない人々に働きかけ、音楽を普及することである。そして音楽の提供者と享受者が対等な立場で一緒に楽しむ双方向的な活動というスタンスが特徴である¹⁾。

打楽器奏者であり、本研究の共同研究者である可児麗子（以下、可児）が、学校でのアウトリーチ活動に興味を持ったのは12年前のことである。京都市立芸術大学2年生の時、当時の音楽科教育法の担当講師 牧野淳子の指導のもと、アウトリーチ活動として尼崎市の公立小学校でボディーパーカッションのワークショップを行ったことがきっかけで、子どもと一緒に演奏する楽しさを知った。その後、大学の音楽科教育法の授業で、学習指導要領により、学校の音楽教育では、音楽づくりや創作の授業を行う必要があることを知り、打楽器を用いた音楽づくりは年齢に関わらず取り組みやすいのではないかと、打楽器を効果的に使えば、子どもがユニークな音楽をつくれるのではないかと考えた。そして、このように打楽器を使って子どもと一緒に音楽をつくる活動は、自分が思い描いているアウトリーチ活動に最も近いのではないかと強く興味を持った。

この後、可児はさまざまな授業のゲストティーチャーとして学校の音楽教育とかわかってきた。そのなかでも、単に演奏のゲストとしてではなく、打楽器奏者と子どもたちが一緒に音楽をつくるアウトリーチ活動の事例としては、石割美紗子（以下、石割）の修士論文の研究プロジェクトにかかわったことが挙げられるであろう²⁾。石割は当時、滋賀大学大学院修士課程で、本研究の共同研究者である林睦（以下、林）のゼミに所属し、音楽家と教師と子どもがコラボレーションする授業の開発に取り組んでいた。その実験授業に、可児は打楽器奏者として

参加し、教師や子どもと一緒に音楽をつくる授業を試みた。このプロジェクトで、可児は2つの実験授業に携わった。1つは滋賀大学教育学部附属小学校2年生を対象とした授業（2007.2.28実施）と4年生を対象とした授業（2007.6.25実施）、もうひとつは宝塚市立小学校での4年生を対象とした授業（2007.5.29実施）である。附属小学校での授業については、クラスの人数が少なかったので児童と一対一で打楽器を使って音で会話をする音楽づくりを行った。たとえば2年生では、マリimbaをつかって、可児と児童が即興的に音楽をつくって、音楽で会話をした。4年生では、マリimbaでの会話のほかに、ボディーパーカッションによる可児と児童のリズム対決を取り入れた。演奏者と児童との一対一の会話は、児童によって発想がちがうため多様性に富んだ音楽づくりとなった。一方、宝塚市立小学校での授業は、1クラスの人数が多いためグループで音楽づくりを行った。こちらは演奏だけでなくパフォーマンスをするグループもいた。一人では思いつかない大胆な表現やグループで活動しているからこそできる音楽もあり、一対一の会話での音楽づくりとはまた違った良さを見出すことができた。最後は、児童がグループでつくった音楽に、可児が即興で加わり、みんなで音楽をつくった。

このようにして、単に演奏のゲストティーチャーとしてだけでなく、子どもと一緒に音楽をつくる活動に参加してきた可児は、特別支援学校で音楽づくりの研究・実践に取り組んでいる、共同研究者の岡ひろみ（以下、岡）と出会い、特別支援学校の子どもたちと一緒に音楽をつくるアウトリーチ活動に取り組むことになった。岡は特別支援学校の教員として、滋賀大学大学院に現職派遣として学び、2013年には特別支援学校における音楽づくりの研究で修士号を取得した。修了後、現場に戻った岡は、2015年度に文部科学省の専門家派遣事業³⁾の採択を受けた。そこで、特別支援学校で音楽家を招いて音楽づくりをしたいと考えた。さらに音楽家を招くなら、打楽器奏者を招いてみたいと考えていた岡は、一緒に音楽づくりができる打楽器奏者を探してほしいと林に依頼し、可児と特別支援学校における打楽器を使った音楽づ

くりを行うことになった。

本論文では、この実践について述べていくこととするが、教育的側面からの実践報告は、岡が音楽教育や特別支援教育関係の学会誌にまとめているので⁴⁾、ここではアウトリーチの視点から考察してみることにしたい。アウトリーチの研究が専門である林は、学校での音楽のアウトリーチ活動は、音楽家、教師、子どもの三者のコラボレーションが鍵となっていることを指摘している⁵⁾。学校では、教師と子どもという二者の関係から、音楽家が入ってくことで、以下の図のような三者の関係が生まれる(図1)。例えば、教師が音楽家に学ぶ、音楽家が教師に学ぶ、音楽家が子どもに学ぶ、子どもが音楽家に学ぶなどの双方向の関係が生まれ、新たな学習スタイルが生じるのである。

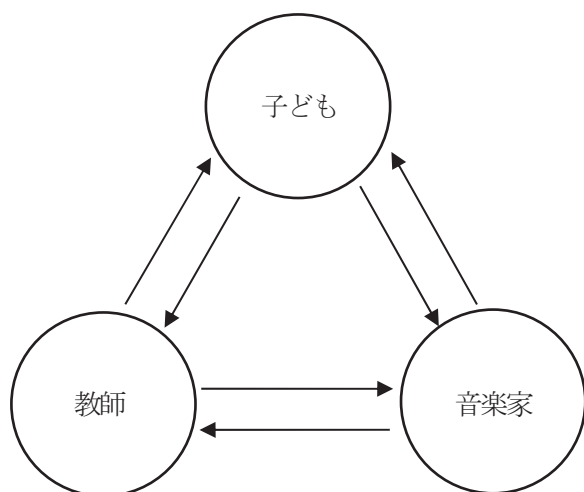


図1. 三者の関係図

このような音楽家・教師・子どもの三者のもっとも密接なコラボレーションができるのが、音楽づくりの領域である。子どもは音楽家の音楽を聴いたり、既存の作品を演奏したりすることにとどまらず、音楽づくりで自分の音楽を表現するからである。また、子どもが表現した音楽によって、教師や音楽家はより深く感じたり、学んだりすることができる。さらに、音楽家や教師がコラボレーションをして音楽を一緒につくすることで、つくる音楽が豊かになったり、一体感を感じたりすることもできる。子どもと一緒につくる際に、リズムは最も本質的で、入りやすい音楽的要素である。そのリズムを中心に据えた打楽器は、三者が一緒に音楽をつくる際にはコラボレーションがしやすいと考える。

本論文では、この三者のコラボレーションという視点をもとに、特別支援学校における打楽器奏者と一緒に音楽をつくる授業について、音楽家・教師・子どもの観点から考察していきたい。

2. 授業のコンセプトと概要

まずはこの授業のコンセプトと概要について、説明す

ることにしたい。(文責：岡)

2. 1 授業の概要と題材設定理由

研究対象である授業は、2015年11月16日～30日の間に全5回の題材として実施した。その内2回は音楽家の派遣なしで行い、1組は最初と最後の回のみ参加した。場所は滋賀県立新旭養護学校の教室と音楽室、中心指導者は岡、サブ指導者は3名、派遣された音楽家は可児である。使用した楽器は、コンガ、ボンゴ、ティンパニ、フロアタム、スネアドラム、ハイハットシンバル、サスペンデッドシンバル、バスドラム、マリンバ等の大きい打楽器や、ギロ、マラカス、ウッドブロック、タンブリン等の小さい打楽器である。

対象生徒は、中学部の2クラス10名、(1組5名・2組5名)(1年生2名・2年生3名・3年生5名)、認識発達3歳～7歳程度である。どの生徒も日常的なやりとりは話し言葉を使ってできるが、発音が不明瞭であったり、言葉の使い方や文章力が未熟であったり、人との関係がスムーズに取れないために自分の思いを的確に表現できなかったりする。こうした生徒たちにとっては、言葉以外の手段でも自分を表現する機会を保障することが望まれる。音楽に関しては、日常的に聴いたり体験したりする音楽ジャンルや活動の幅、そして音楽的な興味関心の幅は狭い。そこで、歌唱や器楽の既成曲を再現する活動だけでなく、音そのものに気持ちを向けて、自分で選んだ音を自分でつないでいく音楽づくりを行うことで、音を使って楽しく自己表現させたいと考えた。次に、具体的な活動内容を記してみたい。

2. 2 活動内容について

①第1時間目の流れ(専門家派遣1回目、1・2組合同授業)

音楽家による《机の音楽》(テリー・ドゥ・メイ作曲)の模範演奏と自己紹介、自分の机を使った音楽づくりの発表、打楽器を使った音楽づくりと発表、音楽家との合奏

(この授業については、次ページの【図2：第1時間目の授業の流れ】を参照されたい。)

②第2時間目の流れ(専門家派遣なし、2組単独授業)

自分の机を使った音楽づくりとソロ発表、打楽器での音楽づくりとソロ演奏、音楽の要素や仕組みの復習、2人と3人のグループに分かれた音楽づくり

③第3時間目の流れ(専門家派遣2回目、2組単独授業)

打楽器を使った音楽づくりとソロ発表、音楽家のアドバイス、図形楽譜の説明、グループに分かれて図形楽譜の作成

④第4時間目の流れ(専門家派遣なし、2組単独授業)

グループに分かれて図形楽譜の作成

⑤第5時間目の流れ(専門家派遣3回目、1・2組合同授業)

通し練習、1組の音楽づくりのソロ発表、2組の音楽

流れ (場所)	活動内容	子ども (C) の動き	教師(T)の動き	音楽家(M)の動き
導入 (教室) ¹	・挨拶 ・M 登場 ・自己紹介 ・鑑賞	音楽の要素(強弱・高低等)を意識して行う。 ² 教室の外でMが鳴らす音を聴き、誰かな?何の音かな?等を考える。 「OK」等の言葉でMが登場する。 名前や仕事等、Mの自己紹介を聴く。	Cとのやりとりで挨拶の方法(音楽の要素)を決定する。 Cの期待感を高めるために、Mの音を効果的につなぐ。登場のきっかけになる言葉を言う。 Mを教室中央に招き、Tは教室の端に移動する。 Cと一緒に聴く。	教室の外で待つ。 音で返事する。CやTの言葉でタイミングを見計らって登場する。 言葉で自己紹介をする。 《机の音楽》を演奏する。
展開 (音楽室)	・机を使った音楽づくり ・発表 ・打楽器での音楽づくり ・発表 ・全体での音楽づくり	一人ずつ自分の学習机を使った音楽づくりを行う。 一人ずつ発表する。 コンガ・ボンゴ・スネアドラム・マリンバ等から一人一台選ぶ。選んだ音を音楽としてつないでいく。 一人ずつ発表する。 Mと一緒に全員で1つの曲を作る。	教室の端からCの前に机を移動する。 Cとやりとりしながら奏法を伝えていく。 曲の終わり方をCと一緒に考える。 発表順を示す。 Cの希望を基に楽器を決める。 臨機にCやMの補助に入る。 Cの様子を見ながら発表順を決める。 曲の始めと終わりを意識させる。	机の移動を手伝う。 Cに寄り添いながら、演奏方法や曲のまとめ方をアドバイスする。 発表に対してコメントを言う。 個々のCにアドバイスをする。 発表に対してコメントを言う 演奏順(始めと終わり)を言葉で示した後、音でリードして強弱等の変化をつけながらCの音をつなげていく。 感想を言う。
まとめ	・感想 ・挨拶	C, T, Mの感想を聴く。 音楽の要素を意識して行う。	話ができる雰囲気を作る。	

¹ 授業に入りにくいCのために、授業の前半は教室で行って気持ちを盛り上げた後、授業の後半は音楽室に移動する。

² その日の当番のCが前へ出て「これから音楽を始めます」「これで音楽を終わります」「礼」と号令を掛ける時に、高い声や、ゆっくり言うなどの音の高低や速度をCが決めて挨拶をする。

図 2. 第 1 時間目の授業の流れ

づくりのデュエットとトリオ発表

上記のような内容で、全 5 回の授業を行い、うち 3 回に可児が参加する形をとった。次節以降は、この実践をとおして、音楽家の視点から可児が、教師の視点と子どもの反応について岡が考察していくことにしたい。

3. 音楽家の視点から

授業の概要を記したところで、まずは音楽家の視点から、子どもと一緒に音楽をつくるアウトリーチ活動の意義について、いくつかの観点から考えてみたい。(文責：可児)

3. 1 打楽器を使った音楽づくりに参加した理由

前述のように学生時代にアウトリーチ活動でワークショップを行ったことがきっかけである。さらに大学の音楽科教育法の授業内で実際に音楽づくりを体験し、音楽づくりにおける打楽器の可能性を感じ、打楽器を勉強しているからこそ分かる様々な奏法を用いることで表現の幅が広がるのではないかと考えた。その後、石割が取り組む修士論文研究プロジェクトに参加して、実際に授業で子どもと一緒に音楽づくりをする中で指導の難しと共にやり甲斐を感じ、もっと子どもと一緒に音楽づく

りをしたいと思うようになった。

次に、ワークショップのような形で子どもと一緒に音楽をつくる活動で、取り組みたいことやねらっていることについて述べたい。まず、取り組みたいことは、打楽器奏者が授業に入ったからこそできる生演奏、そして様々な打楽器の音の種類を紹介し、子どもと一緒に普段の授業ではできないような音楽づくりである。実際に演奏を見せたり、一緒に演奏したりすることで子どもに与える影響は大きいと感じるからである。特に、新旭養護学校の生徒の前で《机の音楽》を演奏した時にそのことを実感した。授業では、《机の音楽》の演奏後に、それぞれが机を使って音楽をつくった。ある生徒(1組 A さん)は、可児が《机の音楽》の冒頭で演奏した特徴的な奏法(机を爪(猫の手)で擦る)を取り入れて音楽を作った。きっと、A さんにとっては、机を爪(猫の手)で擦るという動作や音が印象に残ったのだと思う。発表ですぐその奏法を取り入れたのを見た瞬間に、生演奏の影響力は大きいと感じた。また、様々な奏法を実際に演奏して紹介することも重要である。例えばボンゴをミュートしながら演奏する、スラップをする等ラテンパーカッションでよく使われている奏法を実際に演奏して見せることで、普段、音楽室にある楽器には様々な音

の出し方があることを知れば、音楽づくりの幅が広がる
と考えるからである。

子どもと一緒に音楽をつくるねらいは2つあり、1つは打楽器を使った音楽づくりを通して子どもに音楽を好きになってほしいということである。打楽器は叩けば音を出すことができる。たとえ楽譜が読めなくても、リコーダーが苦手でも、叩けば音を出すことができ大胆な表現ができる打楽器なら、音楽に対して苦手意識を持っている子どもでも主役になれるであろう。また、音楽づくりには正解もなければ間違いもない。自由に表現できる音楽づくりを通して子どもの心の成長を促したいと考えている。もうひとつのねらいは、子どもにひとつの楽器の音色はひとつではなく、たくさんあることを知って欲しいということである。楽器の叩く場所が変われば音色が変わる。さらに、ボンゴなどのハンドパーカッションでは、叩く人の手の厚さによって音色が変わる。楽器には様々な音色がある。自分の持っている音色は、他の人には出すことが出来ないかけがえのないものだということを感じてほしいと思っている。

3. 2 演奏会と子どもたちとの音楽づくりとの違い

さらに、演奏会での打楽器演奏と、子どもと一緒に音楽づくりを行う活動との違いについて考えてみた。まず、演奏会での演奏についてだが、即興演奏をする時は、どのような演奏をするのか事前に自分である程度のプラン（どういう方向性の音楽にするのか、決めのリズムはどうするか等）を立てている。また共演者がいる場合は、自分の意思を相手に的確に伝えるために積極的に音で仕掛けたり、駆け引きをしたりしている。自分に合わせて欲しいのか、相手に譲るのか、音楽の流れを変えたいのか等、相手の表情を見ながら音で表現したり、相手の表現に耳を傾けたりするようにしている。奏者同士の演奏では、お互いに意思をぶつけあって刺激しあいながら演奏していると思う。

それに対して、子どもとの音楽づくりでの演奏について考えてみると、子どもから積極的に音楽をつくりだしてほしいと思っているので、なるべく自分が1音目を出さないようにしている。どんなに待っても音楽が始まらない時だけ、自分から演奏しはじめるようにしている。子どもと演奏する時は、演奏会とは全く違ってプランを何も考えていない。できる限り、子どもがその場で表現したものに伝えたいと思っているからである。また、模倣を取り入れるようにしている。子どもが演奏したことを模倣することで会話をしているようにも聴こえることや、同じように演奏しても、打楽器奏者ならこのような演奏もできるとアピールできるからである。特に会話をしているように聴こえるという体験は、演奏している時よりも第三者として友だちの演奏を聴いている時に気が付きやすいように思う。

自分から子どもに仕掛ける時は、分かりやすい特徴的な奏法を使うようにしている。具体的には、マリンバや

木琴でグリッサンドをしたり、非常に細かいトレモロをしたり、極端な強弱をつけたりすることで、それまでとは違った音楽の流れを作っている。特にグリッサンドは分かりやすいので、子どもによっては音楽の流れが変わったことを察知して、それまでとは違う雰囲気音楽をつくりだしたり、奏者の模倣をしてグリッサンドを沢山取り入れたりする。その変化が面白いと思っているので、最初は自分から仕掛けず、中盤で仕掛けるようにしている。以上のようなことを意識しながら演奏しているため、演奏会で演奏する時と子どもと一緒に音楽をつくる時は、全く違った感覚や価値観で演奏している。

3. 3 音楽づくりの授業での楽器紹介の演奏で工夫していること、気をつけていること

楽器紹介の演奏では、演奏後に子どもにどのような奏法や音色があったのかをこちらから質問することが多いので、分かりやすい奏法を使うようにしている。例えば、小太鼓を演奏するのであれば、打面の中心を叩く、端を叩く、フレイムを叩く、響き線を外して叩く等、子どもが自分で発見しやすい奏法を心がけている。また、音色の変化を感じる為に、ある一定のリズムパターンを演奏し続け、途中でリズムは変えず奏法のみを変え音色が変わったことが分かるようにしている。マリンバや木琴での演奏では、和音を積極的に使うようにしている。同時に音を2つ鳴らすことで単音とは違った響きになるということを感じて欲しいからである。他には、できるだけすぐに真似をしやすい奏法を取り入れるようにしている。例えばコンガを指先だけで叩いてみたり、打面に触れる指の数を1本から5本に増やしてみたりする。変化が分かりやすく真似がしやすい奏法は、子どもが音楽づくりをする時に挑戦しやすいと考えるからである。

3. 4 小学校と特別支援学校での子どもの反応の違い

小学校と特別支援学校で音楽づくりに関わった経験から、小学校と特別支援学校での反応の違いについて考えてみたい。まず、小学校での反応についてであるが、小学校での音楽づくりは、年齢とこれまでの音楽経験によって、反応が大きく違うように感じた。中学年よりも高学年の方が、人前で演奏するのが恥ずかしい、間違えたらどうしようと萎縮してしまう児童が多いように感じる。特に音楽に苦手意識を持っている児童に見受けられる。中学年の方が、ずっと活動に入れるように思った。また、打楽器を使って音楽づくりをするのが初めての場合、音楽づくりに正解も間違いもないとはいえ、考えすぎるあまり、どうしたら良いのかと音楽づくりの最中に固まってしまう児童もいた。その場合、途中まで音楽を作っている他の児童の発表を聴くことによって、このように音楽をつくったら良いと言うコツが分かり、その後、自分で音楽をつくりはじめた。学校の校風やクラスの雰囲気にもよると思うが、この時に他の児童ではなく、可児が演奏すると、「打楽器の専門家だから難しいことが

できるけど、自分には無理だ。できるわけがない」とマイナスに捉えてしまう児童がいた。音楽づくりの活動の最中に固まってしまう児童に対しては、音楽家の演奏よりも同じクラスの児童の演奏を見る方が、取り組みやすいのかもしれない。

小学校での子どもの理解や演奏について想起してみると、音楽家の演奏や友だちの発表を聴く時に、どのような工夫がされているのか、あの面白い音はどうやって演奏したのかと観察をしながら演奏を聴いている児童が多いように感じた。その結果、観察して分かったことを自分の音楽づくりに取り入れた児童が多かった。特に音楽経験がある児童に関しては、何故、その音を自分の音楽に取り入れたのかを質問した場合、ただ奏法が面白いだけではなく、「この音を取り入れた方が、雰囲気が変わって良いと思った」とより深く考えていることが分かり、興味深かった。また、年齢が上がれば上がる程、考えて音楽をつくっているように感じた。グループで音楽をつくる際は、どのようにして盛り上げるか、誰が合図を出すのかなど細かく打ち合わせをするグループが多くみられた。また、マリンバ、木琴、鉄琴など音階のある楽器を使う場合は、綺麗なメロディーをつくろうと模索し苦戦する児童が多かった。音階がある楽器はメロディーを奏でると認識している児童が多いように感じた。その為、マリンバ等を太鼓の様にリズムのみ担当するという発想をするグループがほとんどいなかったことに驚いた。

一方、特別支援学校も学校によって違うとは思いが、今回の実践では、音楽の授業で音楽づくりを経験した生徒が多いため、ほとんどの生徒がすんなりと音楽づくりに挑戦していて驚いた。戸惑う生徒もいたが、友だちが机で音楽をつくっているのを見て、自分なりに音楽をつくっていた。小学校の高学年よりも戸惑っている時間がとても短く感じた。特別支援学校の生徒の方が、他者を気にせず自分の世界にすんなりと入りやすいのかもしれないと感じた。また、可児が演奏した際、どの生徒も非常に集中して聴いていた。《机の音楽》に出て来る特徴的な奏法に関しては多くの生徒が、机を手のひらで叩くのと違った音であることを理解出来ていたようだ。しかし、分かりやすい音色に関しては、多くの生徒が理解出来ていたが、細かい微妙な差に関しては、自分で発見できる生徒とそうでない生徒がいるように感じた。特に小太鼓を担当した2組Bさんの反応が非常に興味深かった。音楽づくりの前に可児が小太鼓を演奏してから「太鼓の皮の中心、端、フレーム、響き線を外すと音が変わる」ということを全員に説明した。その後、音楽をつくっている最中（個人練習中）に、彼はスタンドスティックで叩きだし、スタンドの色々な部分を叩きながら「場所によって音がちょっと違う」と自ら発見した。おそらく、これまでの音楽の授業で小太鼓を演奏する時は皮の部分しか叩かなかったと思う。範奏を聴いて、フレームをスティックで叩いても良い→スタンドも叩いてみよう→スタンドも叩く所によって微妙に音が違うと自ら試

し、発見できたことが非常に興味深かった。この生徒のように発見し、理解し、言葉でそれを表現できるかどうかは生徒によって違うのではないかと思ったが、自分が演奏することによって、生徒が自ら試し発見するきっかけを作れたことを目の当たりに出来た。演奏に関しては、特別支援学校の生徒はその時々に関心しているものを表現しようとしているように感じた。生徒によっては小学校の児童と同じように、格好良いリズムで終わろう、静かに終わろう等と自分でプランを考えて演奏しているように見えた。また、1組と2組で一緒に全員で演奏した時に興味深かったのは、生徒によって周りの音の聴き方が全く違った点であった。2組の生徒（特に3年生）は周りをよく見ていて、奏者がクレッシェンドをする時やデクレッシェンドをする時にいち早く反応し、終わる。そして音楽が終わりに向かう時も、素早く反応し終わる雰囲気を演出して、他の生徒にも音で伝えようとしていた。1組の生徒の中には、自分の音楽を表現することに夢中で音楽の変化（クレッシェンド、デクレッシェンド、音楽が終わりに向かう）に気付くのが遅くサポートで入ってくださっている教師にヒントを貰っている生徒もいた。全員で演奏する時に、周りの音を一番に聴いているのか、自分の音を一番に聴いているのが生徒によって違うのが分かった。確かにアンサンブルをする上では、周りの音を聴くのがとても大事であるが、自分の中にある音に耳を傾け、それを素直に表現しようとする力もとても大切だと思う。どちらの良さも感じる事ができたとても面白い音楽だったと思う。

3. 5 小学校と特別支援学校、それぞれの可能性と課題

ここで、小学校と特別支援学校、それぞれの可能性と課題、それぞれにふさわしい実践内容や指導方法について考えてみたい。小学校では音楽づくりの時に図形楽譜を用いず、その場で作りだされる音楽を楽しんだ。今回の特別支援学校での活動を通して、図形楽譜を作ることでの再演ができるというのは非常に大きなメリットだと考えたので、また小学校での音楽づくりをする際は図形楽譜を作りたいと思う。その前提で新たな可能性を考えると、つくった図形楽譜を他のグループが演奏するのが面白いのではないかと考えた。友だちが作った図形楽譜を演奏するとなると、楽譜から色々なことを読み取ろうとしなければならない。どのような音楽なのか、音楽はどこで盛り上がっているのか、この部分はどのような音色が合うのか等を考え、音を探すことによって、同じ図形楽譜でもグループによって違った音楽になるのではないかと思う。この楽譜を読み取るという活動は、教科書に記載されている歌曲や合奏曲などを演奏する時にも楽譜から作曲者の考えを読み取る練習になるので良いのではないかと考える。小学校での音楽づくりの課題は、特別支援学校の生徒と比べて児童が少々、考え過ぎてしまう点である。勿論、考えながら音楽をつくることは大事だが、自分の中に流れている音にも耳を傾けることが出来

たら、より面白い音楽をつくることができるのではないかと思う。可児と一緒に音楽づくりをした児童の多くは音楽づくりの経験があまりなかったことも原因のひとつだと考える。実践方法としては、友だちと一対一で、音で会話をする等、普段からちょっとした音楽づくりの経験を重ね、そのつくった音楽を認めることで、音楽の正解はひとつではないし、間違いもないということを実感できれば、もっと自由に表現できるのではないだろうか。また、発表をビデオに撮り、客観的に見ることで自分の演奏や友だちの演奏の良さや面白みを再発見できる。ただ面白いと感じるだけでなく、何故面白いのか、どのようにしたらもっと表現が豊かになるかと考えることによって、更に表現の幅も広がるのではないだろうか。

特別支援学校での音楽づくりは非常にメリットが多いように感じる。言葉で上手く表現できなくても音で自己を表現できるからである。色々な楽器に触れたり、音楽づくりの経験を重ねたりすることで更に自信もつき、表現の幅も広がるのではないかと思う。課題としては、身体に障害がある生徒の場合、活動に制限があることだ。本人がしたいと思っていることがあっても身体がうまく動かないこともあった。今回の実践では、活動の際に普段から指導している教師が、サポートをしてくださったので（例えば車いすの角度を変える、教師が支える等）身体に障害のある生徒も音楽づくりを行うことができた。特別支援学校で音楽づくりを行う場合、生徒それぞれの障害や性格などを理解している教師の協力が必要不可欠ではないかと思う。それを踏まえた上で、活動に制限がある生徒も一緒に音楽をつくるためにはどのようにしたら良いのかを考える必要があると感じた。今後の指導法としては、より濃い表現ができるように色々な種類の音楽に触れることができると良いのではないかと考える。例えば、1組の生徒で、1回シンバルやティンパニを叩きだしたら強い音量で自分が納得するまで演奏しつづけた生徒もいた。音楽には休符があること、色々な音量、様々なリズムや音の長さがあることを知ることができると表現の幅がもっと広がるだろう。例えば、色々な音量があることを知るために、*p*の音量だけで音楽づくりをする。次は、*mf*の音量だけで音楽づくりをするなど、音量を体で感じることで、自分が音楽づくりをする時に、選択の幅が増えるのではないかと期待できる。同様に音符の長さやリズムを意識した音楽づくりをし、身体で様々な音楽の要素を体験することで、音楽づくりに生かされていくのではないかと考える。

3. 6 特別支援学校の音楽づくりでの今後の展望、音楽家がかかわるからこそできること

まず、特別支援学校の音楽づくりで今後目指したいことは、先にも述べたように、それぞれが体の中で感じているものをもっと濃く表現できると良いということである。濃い表現をすることで自分の感じていることが他者により強く伝えることができるからである。その為に、

先に述べたような様々な音楽の要素を体験できると、表現の幅が広がるのではないかと考える。今回の特別支援学校での活動を通して、やはり図形楽譜をつくるのはとても良い活動だと思った。再演ができるのは勿論のこと、楽譜を作ることで他者に音楽の意図を伝えることができるからである。それぞれの個々の力や障害の程度により教師のサポートが必要となり、図形楽譜のつくり方も違うかもしれないが、図形楽譜を取り入れ、楽器だけでなく楽譜でも音楽を表現する方法を考えたり体験できたりすると、良いのではないかと期待する。

専門家だからこそできることは、大きく2つあると思う。1つは、色々な学校で行ったアウトリーチの経験をいかすこと。もうひとつは、子どもと一緒に演奏することではないだろうか。専門的に打楽器を勉強したからこそ知っている様々な奏法の中から、それぞれの生徒の力に合わせて挑戦できそうな音を考え提案するということができる。特に特別支援学校では、打楽器の演奏の後に提案したり説明したりする時に、それぞれの生徒に合わせて話す内容を変えた。音の強いと弱い、ゆっくり演奏する場合と速く演奏する場合の違い、叩く場所を変えてみる等、分かりやすくパッと実践しやすい物を提案する場合もあれば、自分でリズムをつくることのできる生徒に対しては、このリズムを1回ではなくて2回演奏してみてもどうかと少し難しいことを提案した。そういった提案を生徒によって変えることが出来たのは、勿論、自分が打楽器奏者だからということもあるが、他の学校でアウトリーチの経験をしたことが大きいと考える。

これまでも何度も述べたが、やはり打楽器は年齢や障害の有無に関係なく誰でも演奏可能な楽器だということを実感した。この良さを最大限に使って音楽づくりができれば、子どもはもっと面白い音楽をつくることができるように思う。その提案ができるように自分自身がもっと学び、色々な経験をしなくてはいけないと感じる。子どもと一緒に音楽をつくることで学ぶものは多い。例えば、今回の特別支援学校の実践で、2人で1つのボンゴを叩いたペアがいたが、この発想は自分にはないものだった。通常、ボンゴは1人で1台を演奏するという感覚が強かったからである。こういった打楽器奏者だからこそ思い浮かばない発想を知ることができるのが、子どもと音楽づくりをする醍醐味のひとつだと思っている。また、宝塚市立小学校での音楽づくりの時に自分で楽器を作ったグループがあった。その中に数人、竹馬のような物を作って発表している児童がいた。おそらく音量的にはほとんど聴こえないが、グループの一員として楽器を使ってパフォーマンスをしているのが印象的であった。打楽器の既存曲でもパフォーマンスを要求されるシアターピースがある。音楽づくりの時に、音を出すだけでなく音楽に合わせて身体表現をしたり、音は出なくてもパフォーマンスをしたりと、音にとらわれ過ぎない自由な表現ができると、子ども自身がもっと音楽づくりの可能性を自ら見だし取り組んでいけるのではない

かと思う。今後も教育機関での音楽づくりを通して打楽器を用いた音楽づくりについて研究していきたい。

4. 教師の視点と子どもたちの反応

特別支援学校で打楽器奏者とともに音楽づくりを行う意義と可能性について、①音で表現すること、②打楽器を使って表現すること、③打楽器奏者とともに音楽づくりを行う意義と可能性の3つの視点から考えてみたい。(文責：岡)

4. 1 音で表現すること

特別支援学校の授業では、やってみたいという思いを膨らませることや、膨らんだその思いを何らかの手段で伝えることを大切にしている。自分の思いを伝えるためには、言葉が有効な手段ではあるが、特別支援学校には言葉で自己表現することが苦手な生徒がいる。これは言葉を理解する力を獲得していない場合と、言葉は獲得しているけれども重複する障害から言語表出が難しい場合、あるいは意欲や自信がないために表現できない場合等がある。こうした場合でも、言葉に依拠しない表現手段を使って自己表現する機会が保障されることで、自分に自信がつき、意欲的に自己表現できるようになると考えている。言葉に依拠しない表現手段のひとつが音を使うことである。音を使って自分を表現する心地よさや相手に認めてもらえる喜びや、相手の表現を受け止めて思いを共有する楽しさを感じることで、人との関係が豊かになり興味・関心が広がると考える。

4. 2 打楽器を使って表現すること

打楽器は、親しみやすさがあり、斬新な表現が可能なことから、子どもと一緒に音楽づくりがしやすい楽器であることは、可児も記述している。ここでは特別支援学校の音楽づくりにおいて、打楽器を使う特徴について考えてみたい。打楽器は、自分が手を動かすことで必ず即時に音が鳴る仕組みの楽器であり、動きと音との因果関係がわかりやすい。また打面を打つ手の形や動きを変化させることで容易に音の強弱や音色の変化をつくることができる。さらに大きな打楽器であれば友だちと一緒に同じ楽器を鳴らすことが可能である。また友だちが演奏方法を工夫している姿を見て楽しむことができる。また、今までに聴いたり演奏したりした経験がある楽器が多い。種類も豊富であり、好きな楽器を選ぶ楽しさを作りやすい。打楽器はこのような特徴があることで、楽器を使った活動のわかりやすさや楽しさを引き出すことができる。特に、認識的な幼さや多動性や転動性があるために、気持ちを集中させ続けることが難しい生徒にとっては魅力的な楽器である。

4. 3 特別支援学校において打楽器奏者とともに音楽づくりを行う意義と可能性

以上みてきたように、音で表現することと、打楽器表

現の特徴を踏まえて、特別支援学校において打楽器奏者とともに音楽づくりを行う意義と可能性について、生徒の視点と教師の視点に分けて考えてみたい。

① 生徒の視点から

まず、授業で見られた生徒の作品を紹介することで、本授業の意義と可能性を示したい。例えば、手拍子と両手で机を打つ奏法を何度も繰り返して音楽をつくる生徒や、打面を打つ位置や手の形を工夫して、肘打ちや指打ち、打面をこする等の数種類の奏法を自由に組み合わせる生徒がいた。また、拍節的な音楽をつくる生徒や、休符や音の長さを自由に組み合わせる非拍節的な音楽をつくる生徒もいた。また、曲の長さも様々であり、数秒で終わる曲をつくる生徒から1分以上続く曲をつくる生徒までいた。

また次のような嬉しい事例もある。音楽は苦手だと言っていた生徒が、本授業の数日、音楽の授業がない日にも「僕も音（オト）やりたいな」と教師に伝えてきていた。また言葉でスムーズに意思表示することが難しい生徒が、最初の授業で、非拍節的なリズムで打つことを楽しめたことで、次の授業では、スキップで音楽室に向かっていた。これらは、自分で納得できる音表現ができたことが自信になり、次の活動への意欲につながっていた例である。

このように生徒は、音楽家が演奏する多彩なリズム表現や豊かな音色を目の前で見聴きすることや、楽器の仕組みや各種奏法の組み合わせ方の説明を聴くことで、音楽家が持つ専門的な知識や技能に触れることができる。また、音楽家の奏法を真似したりアレンジしたりすることで、様々なリズムや音色を使った音楽づくりにつなげることができる。

② 教師の視点から

教師にとっても目の前で多彩な演奏を聴く機会は、様々な音のつながり方や演奏方法を見聴きできる貴重な機会になり、教師の音楽観を拓けることができる。

また、授業の事前・事後に授業内容や子どもの実態課題について音楽家と話し合う機会を持つことで、授業内容や配慮点を改めて考える機会にできる。音楽家から生徒へのアドバイスについても、教師が感じたり考えたりしたことと同じであれば、教師が今後指導していく上での自信になる。また、教師と違う視点であれば、教師の視野が広がることになる。例えば今回の実践では、既成曲の再現はできるが自由に演奏する活動には抵抗感がある生徒に対して、マリンバ等の音階のある打楽器を勧めることで、メロディーの力を借りたりリズム表現ができるなどのアドバイスを受けた。教師の指導上の工夫につながることができた例である。

③ 三者の関係を考える

普段の授業では教師と子どもの二者が相対する関係であるが、今回の実践では、林の理論のように音楽家と教師と子どもとが三者の関係を築ることができた。こうして関係性が広がったことで、普段の授業とは違う視点で

臨むことができた。例えば子どもに対する音楽家のアドバイスを聴いて、教師が今後の指導上の参考にできる場面があった。また音楽家と子どもがやりとりしている様子を、教師が第三者的な位置から客観的に見られたことで、子どもの音表現の広がりを改めて感じ取れる機会になった。

5. おわりに

本論文では、打楽器奏者とともに音楽をつくるアウトリーチ活動について、特別支援学校の事例を中心に、それぞれ音楽家、教師の視点、子どもの反応について考察してきた。その結果、三者が学び合い、発見し合い、知識や表現の幅が広がるというアウトリーチの一般的な効果だけでなく、さらに音楽をつくること、打楽器を用いることの効果が見られた。音楽をつくることに関しては、特別支援学校の生徒たちは感じていることを自然に表現し、つくることを存分に楽しんでいて、言葉に依拠しなくても音で表現できることで、自信や意欲につながるといった効果が見られた。打楽器を用いることに関しては、子どもが手を動かすことですぐに音が鳴るので動きと音との因果関係がわかりやすく、手の形や動きを変化させることで強弱や音色の変化をつくることができ、友だちと一緒に鳴らしたり、様々な種類の楽器を選んだり、組み合わせたりとコラボレーションが容易にできるなどのメリットがある。さらに、打楽器奏者が子どもたちの近くで、さまざまな奏法、多彩なリズム表現や豊かな音色を実演することによって、子どもの表現の幅が広がり、新たな音楽づくりにつながる。このような点から、打楽器奏者と音楽をつくるアウトリーチ活動は三者の究極のコラボレーションができる活動だと言えるであろう。今後も打楽器奏者と音楽をつくるアウトリーチ活動をととして、三者の効果的なコラボレーションのあり方について研究を進めていきたい。

【注】

- 1) 林 (2003) p.2
- 2) 石割 (2008)
- 3) 『平成 27 年度対話・創作・表現活動等を取り入れた人間関係形成能力等の育成に資する教育活動に関する実践研究 (専門家派遣) 〈学校申請方式〉』文部科学省初等中等教育局教育課程課
- 4) なお、この実践の教育的な側面からの実践報告は、岡 (2016) などに詳しい。
- 5) 林 (2003) p.185

【参考文献】

- 石割美紗子「学校音楽教育における地域との連携に関する研究－音楽家との新たなコラボレーション授業の開発を中心として－」(滋賀大学大学院教育学研究科修士論文, 2008)
- 岡 (黒田) ひろみ (2013 a) 「特別支援学校における

創造的音楽づくり実践に関する研究」(滋賀大学大学院教育学研究科修士論文, 2013 a)

岡 (黒田) ひろみ (2013 b) 「養護学校高等部における音楽授業アンケート」『滋賀大学大学院教育学研究科論文集』第 16号, pp.25-34.

岡ひろみ (2014) 「特別支援学校における「音楽づくり」の実践的意義と可能性－高等部での授業実践を通して考える－」『人間発達研究所紀要』第 27号, pp.68-82.

岡ひろみ (2015) 「特別支援学校における音楽づくり－楽器の特徴と生徒の発達の特徴との関連－」『音楽教育実践ジャーナル』vol.12, no.2, pp.108-119.

岡ひろみ (2016) 「特別支援学校における打楽器を使った音楽づくり－専門家派遣事業 (文部科学省) の採択を受けて」『音楽教育実践ジャーナル』vol.14, pp.24-33.

林 睦「音楽のアウトリーチ活動に関する研究－音楽家と学校の連携を中心に－」(大阪大学大学院文学研究科博士論文, 2003)